

- 李丙濤 [1932] 高麗初期の図識及び神秘思想1~3 / 『朝鮮』 207~210.
- 李永子 [1969] 天台四教儀に関する問題 / 『印仏研』 35(18-1)
- 林在川 [1980] 韓国仏教における「宝」について / 『印仏研』 57(29-1)
- 章輝玉訳 [1993] 「海東高僧伝」 / 『現代語訳一切経; 1』 / 大東出版社
- 章輝玉 [1997] 東アジア仏教の相互交流—10・11世紀の韓・中仏教の交流関係— / 高崎・木村編『東アジア社会と仏教文化』 (春秋社)
- 張愛順 [1997] 普覚国尊一然の仏教観—『三国遺事』を中心として— / 『印仏研』 89(45-1)
- 全宗釈 [1987] 高麗仏教と元代喇嘛教との関係—喇嘛教の影響を中心に— / 『印仏研』 70(35-2)
- 鄭世成 [1999] 高麗大覚国師義天の研究 / 『仏教学論集』 23(立正大)
- 崔柄憲 [1986] 大覚国師義天の天台宗創立と仏教界の改編 / 『朝鮮学報』 118
- [1987] 三国遺事に見える韓国古代仏教史の認識—仏教教学と宗派に対する認識問題を中心に— / 『アジア公論』 16-4
- 韓京洙 [1990] 普照知訥禪師の浄土観 / 『印仏研』 77(39-1)
- 韓基斗 [1981] 韓国仏教の五教両宗問題 / 『朝鮮学報』 98
- 韓泰植 [1983] 延寿門下の高麗修学僧について / 『印仏研』 63(32-1)
- [1997] 高麗・義天の浄土観について / 『印仏研』 91(46-1)
- 洪潤植 [1976] 『韓国仏教儀礼の研究』 / 隆文館
- [1981] 「仏画にみる韓国の信仰体系」 / 『韓国文化』 3-4

サトウ アツシ (東洋大学非常勤講師・博士(文学))
キム チョンハク (東京大学博士課程・哲博)

朝鮮時代の仏教に対する研究

金 天鶴

1. はじめに
2. 通史
3. 仏教政策と仏教儀礼
4. 仏書刊行
5. 人物研究
6. まとめ

1. はじめに

日本における朝鮮時代の仏教に対する研究は、三国時代や高麗時代の仏教の研究に比べるとそれほど数多くない。それについて様々な理由が考えられるが、一つには、韓国(朝鮮)仏教史の中で朝鮮時代の仏教を衰頹の仏教と見ていたことが挙げられるであろう。要するに、教学の伝統が積み重ねられてきた日本の観点から見た場合に、朝鮮時代の仏教は韓国仏教の中でも後れる仏教になる¹⁾。

しかしながら、朝鮮時代の仏教に対する研究は早くから興味を持たれることになる。今西龍は1911年の「朝鮮仏教関係書籍解題」の中で韓国仏教研究のための書物に関する紹介と解題、またほぼ同時期である1911年から1912年の間に古谷清「朝鮮李朝仏教史梗概」から開始される。以降、日本

¹⁾ この論の中で、韓国仏教は韓半島全島の仏教を指すことにし、朝鮮時代を指すときは、「朝鮮時代仏教」とすることにする。

での朝鮮時代仏教に関する研究は徐々に増加する。その中で教学に関わる分野はほとんど禅と華嚴に関する研究であるため、それぞれの担当に譲り、ここでは、①通史 ②仏教政策と仏教儀礼 ③仏書刊行 ④人物研究の項目に分けて紹介する。

2. 通史

朝鮮時代仏教の研究は、前述したように、今西龍[1911]「朝鮮仏教関係書籍解題」がきっかけになったといえるだろう。今西はこの中で、歴史書、野史記録、地方志、僧の文集、寺の碑銘などの金石文、道家や儒家の文集までを含め解題を行っている。そこでは朝鮮時代の全体を仏教衰退の時代と理解し、僧の文集などは意味をあまり持たないと評価する。但し信仰が残ったことが死滅には至らなかった要因とする²。

続いて古谷清「朝鮮李朝仏教史梗概」が出る。これは1911年から1912年の間に『仏教史学』に連載されたものであり、朝鮮時代の仏教史を宗教史的な側面から重要視している。古谷の論旨は、太祖の仏教信仰・儒仏の衝突などの項目を設定しながら、朝鮮仏教が儒教の排斥を受けながらもその勢いが全然奪われなかったと述べ、それに婦女子、庶民などの信仰を高く評価するのが古谷の叙述態度である。こうした古谷の朝鮮仏教に対する観点は、今西が朝鮮時代の仏教を衰退の時代だけで捉えることとは異なる。

一方、宗教史の観点から書かれた青柳南冥 [1911]『朝鮮宗教史』は宗教史でありながらも、多様な宗教に関心を持ち、朝鮮仏教に対しては排仏の面だけに焦点をあてて論じている。しかし同じく宗教史である吉川文太郎 [1921]『朝鮮の宗教』は、時代と時代の中心テーマを組み合わせで論じな

² 資料として注目されるのは、当時、東京外国語大学校韓国校友会の『韓籍目録稿本』の仏家部にある35の書物を紹介していることである。その中には、『一乗樞要』『千載龜鏡』『錐洞記』が義相の作となっており、一乘法界図と法界図序並略疏をととも義相の著作とされていることである。これに対しては今後、具体的な調査が必要となるであろう。

がら、朝鮮における女性の信仰を強調し、古谷と共通する面を示している。

さて、これらの宗教史や書誌学的な側面ではなく、仏教思想の視点からのまとまった研究は、1929年に刊行された高橋亨『李朝仏教』が最初である。本書の内容は、高橋が1912年から発表した論文の内容がほとんど収録されている。ここでは、その重要な内容を紹介しておく。

1912年の「朝鮮仏教に対する新研究」では、朝鮮時代の仏教は、社会的な宗教定義から見ると既に亡びているが、純粹の宗教の立場で、個人の信仰の面からは最近まで生きたとする。こうした評価は古谷氏の観点と一致するといえる。

1914年の「朝鮮仏教宗派通減史論」では、朝鮮の宗派が朝鮮時代の世宗代になって、禅宗即臨濟宗、教宗即華嚴宗以外の宗旨はすべてが閉止することになったとする。それが西山大師以降になると、純禅でも純華嚴でもない、禅教兼修の一宗派となったとする。しかし、包意的には禅主教徒、教予備禅本の朝鮮禅が形成されたと解釈する。

1916年の「朝鮮寺刹の研究」では、朝鮮時代の寺刹の特徴を次のように五つにまとめている。

- 一 多く深山幽谷に存在すること。
- 二 檀家の皆無くなること。
- 三 寺有財産の収入によりて維持すること。
- 四 祈祷依頼者の稀に来る外は俗人の宗教的用件に因りて山門に入る者殆んど無きこと。
- 五 稍々名ある寺刹は其の所属僧侶の数著しく多いことである。

更にこの五つの項目について高橋は朝鮮時代の仏教に関して次のように述べる。

第一から第四までは、朝鮮伽藍が実際社會と没交渉にして、仏法は単なる伽藍内に局限せられることを意味し、第五は伽藍が仏教徒のために宗教的治外法権地を与え、勢いその合群的生活を促進させるを意味する

とし、これによって、朝鮮仏教が全然出世間教であり、衆生を救うことから遠くなったと評価する。

1922年の「李朝における僧職の変遷」と朝鮮の僧職が無くなる過程を追及している。これは僧職の変遷から朝鮮時代の仏教の流れを照明した論文である。これによると朝鮮の僧職は、禅宗か教宗かにより名称が異なる。しかもその僧階は普雨以来無くなる。西山大師以降になっては僧将となり、僧階とは言えない。それ以来、僧侶に山城の守備を任せることになったことを論じている³。

このように、宗教社会史の立場を以って仏教の社会的な機能や現象を叙述することが高橋の関心であり、『李朝仏教』はこうした考え方がベースとなっている。『李朝仏教』の目次の構成から判るように⁴、特に僧政に関心が多いのは、朝鮮仏教に対するこうした高橋の観点に理由がある⁵。また、本書の序の中で、韓国仏教は教理の発達からは中国仏教に外ならないが、しかし宗教史の盛衰から、即ち宗教学的な観点からは、朝鮮時代の仏教は新鮮な学的興味を提供すると述べるのも高橋の観点を理解するに有益である。

こうしたベースから生まれた本書は、朝鮮時代の仏教を国家の宗教政策と教自体の主旨や伝燈とによって見ている。

即ち、国家の教政の上からは、僧科が残っていた成宗までを「第一篇国初の仏教」とし、それ以後を「第二編李朝仏教第二期」とする。次に宗教政策及び教自体の主旨や伝燈に基づいては宣祖以前と以後とに二分する。即ち宣祖代には西山と浮休が現れて朝鮮時代仏教の宗旨となり、それ以後彼らの弟子達によって朝鮮時代仏教の流れがさらに展開するので、彼らの門徒の類派を中心に、これに彼等が活発に活動する孝宗代からをあわせて朝鮮時代仏教の第三期として、本書が書かれる時期まで論ずる。一方、教

³ [1951b]「李朝僧將の詩」(『朝鮮学報』1)の中では、この論を詳しく同じく論じている。

⁴ 目次については、始めの通史的研究を参照されたい。

⁵ こうした観点は、大類純[1971]「朝鮮仏教考察序説」にも受け継がれている。

学の面では禅論争まで論じる。そして「第四編は李朝仏教余説」として、寺田と僧職などを触れる⁶。

『李朝仏教』の翌年に出版された忽滑谷快天[1930]『朝鮮禅教史』では、第四篇に禅教の衰頹時代として朝鮮時代を論じている。だが、本書は、韓国仏教全体を対象としているので、朝鮮時代だけを対象としている『李朝仏教』よりは、朝鮮時代の仏教の中身が薄くなっている。その中、忽滑谷快天の朝鮮時代に対する衰退時代としての規定は、以後、高橋亨の時代分類とともに認められるようになった。

例えば、江田俊雄[1958]は、朝鮮時代を仏教衰頹期と見た上で、さらに成宗までを仏教公認期、次から仏教漸衰期、孝宗代から仏教衰退期としてみている。また鎌田茂雄も幾つかの韓国仏教の叙述でこの時代区分を受容しており、比較的に最近書かれた福士慈稔[1995]の中でも受け継がれている。しかし、朝鮮時代仏教に関する研究は、それ以来進展はあまり見られず、鎌田茂雄の[1983・1987]『朝鮮仏教史』からも見られるように、三国や高麗時代に中心がおかれている。

朝鮮時代の仏教研究は西山を中心とした禅宗に集中している。禅に関する整理は他に譲ることになるが、朝鮮中期以降の仏教に対しては注目すべきであろう。その中に、韓基斗[1973]は、19世紀の秋史が実学的立場から韓国仏教が立て直すべきだと主張して以後、その勢いが近代仏教においての革新性を齎したと評価したことは、近代仏教を読み取れる一つの方法論になりうると思われる。しかし、日本で朝鮮時代の仏教に関する研究は、そこまでは視野に入れていないようである。

こうした状況の中で、日本では日本側の朝鮮での宗教活動に関しては研究が進んでいる。近代仏教に関する記述は、高橋亨や忽滑谷快天の著述でも触れている。韓国の立場からは、申正午[1984]のように日蓮宗僧佐野の要請による朝鮮時代の僧の漢城入城禁止解除を日本仏教の護法的行為として

⁶ 本書に対しては、中村健太郎[1930]に有益な書評がある。尚、江田俊雄[1930]は『李朝仏教』が教理史と教会史を一緒に扱う文化史的な仏教史研究方法を示唆していると評価した。

高く評価しているが、大体は、睦楨培[1981]のように近代において日本の韓国布教活動は、宗教が政治に利用されたことと指摘するように、批判的立場である。

日本の韓国布教活動に関する研究は、それぞれの宗派との関聯を中心として研究が行われ、美藤遼[1979]「明治仏教の朝鮮布教」と高橋勝[1987]「明治初期における朝鮮開教と宗教政策—特に真宗大谷派を中心に—」は、真宗大谷派の朝鮮進出に関して、布教の原則は眞俗二諦の原理を以て朝鮮人を俗と規定、朝鮮人の皇国臣民化することであった述べる。また、小島勝[1989]は、浄土真宗本願寺派を取り上げながら、真宗の朝鮮開教史とはその「侵略性」を念頭に置きつつ、それぞれの時期における実相を明らかにする必要があるという。

最近、工藤英勝[1998]は曹洞宗が組織的に「日韓合併」の国策に深く関わっていたことと、宗議会における文書によると、朝鮮布教において韓国の僧侶と民衆を差別した意識を持つことに関して批判的な観点から注目している。

3. 仏教政策と仏教儀礼

(1) 仏教政策

朝鮮時代における国家の仏教政策の関聯では、高橋亨『李朝仏教』の中での朝鮮時代の僧政及び僧職などに関する論文が参考になる。以後高橋亨[1951]「李朝僧将の詩」では、西山・惟政から蓮潭までの朝鮮僧将の詩を通してそれらの思想や精神を考察する。僧軍に関しては、吹田和光[1974]「李朝時代に於ける僧軍について」の中でも触れられている。この論文は、朝鮮時代における僧軍について『実録』をもとにして分析するものであり、前期には土木工事に働かされながら度牒を受ける事になるが、後期になると戦争もあり、軍役となってしまうことで、僧侶の減少や寺の荒廃を助長し、仏教衰退の一因をなしたという。これと関連して田川孝三[1960]「李朝における僧徒の貢納請負—世宗末・文宗朝を中心として—」では、貴族社

会の仏教信奉や擁護と社会との関係を、特に僧徒の貢納請負ということから資料を批判的に探り整理している。

一方、蔡沢洙[1971]「韓国仏教の伝統的学習教育課程について」は、現在の僧団における教育制度が17世紀に成立したことを述べている。

(2) 仏教儀礼

朝鮮時代の仏教儀礼に関しては、洪潤植[1976]『韓国仏教儀礼の研究』から伺うことができる。本書は、朝鮮の仏教儀礼は、民衆仏教への方向を指向し、民衆の様々な信仰心を高めるため苦勞していると述べ、儀礼要集である『梵音集』に注目する。こうした観点から朝鮮仏教における仏教儀礼の芸能文化的性格を強調する。

4. 仏書刊行

朝鮮時代の仏教は儒教に弾圧されていたが、古谷清[1911]は、朝鮮に来渡し請経した日本の僧侶を通じて当時の朝鮮仏教が盛行した状況を読み取っているし、黒田亮[1940]『朝鮮旧書考』にも書籍特に仏書の刊行から見た朝鮮文化の一面などが書かれているほど朝鮮時代での仏書刊行は朝鮮時代仏教の底力として認められる。

江田俊雄[1956]「仏書刊行より見た李朝代仏教」は、先に著した[1932]「朝鮮本元亨釈書について」、[1934]「朝鮮語仏伝に就いて」、[1935]「朝鮮版法華経異版考」、[1936]「李朝刊経都監と其の刊行仏伝」などの研究から進め、仏書刊行の面から朝鮮仏教の性格を論じている。ここでは官版・寺版の仏書の種類を漢文と諺文に分けて表を作成し、論疏などが第一位を占めることから朝鮮代の仏教が学問的・研究的にも相当高く評価できるという。そして民衆と親しみを表す諺文の仏書刊行から朝鮮時代を五つの時代に分ける。

これと関連して朝鮮時代になって日本から大蔵経が請求された件については、既に菅野銀八[1921]「高麗板大蔵経について」のように高麗大蔵経

と日本の交渉との関係から述べられ、今村鞆[1930]「足利氏と朝鮮の大蔵経板」と川口卯橘[1931]「大蔵経板求請と日鮮の交渉」では、その歴史的な関係を詳しく論じている。続いて、江田俊雄[1955]「足利義持による高麗蔵経板の強請顛末」、同[1956]「日韓国交を媒介した高麗版大蔵経—足利義持と李朝世宗の場合」は日韓交流の視点から、1389年の足利氏最初の請経から足利義澄の最後のそれまで、約100年間に80回に亘ることを要約している。これに関して請経の中心寺である安国寺を中心と論じられ、丸亀金作[1966]「高麗の大蔵経と越後安国寺とについて」が発表された。また、村井章介[1987]「朝鮮に大蔵経を請求した偽使について」は、対外関係の視点から述べられる。

5. 人物研究

朝鮮時代の僧侶については、高橋と忽滑谷の研究にほとんどが取り上げられている。しかし、それらに関する言及は避け、それ以後になって興味をもたらし研究された人物を中心として触れることにする。その場合、次の三人に絞られる。

(1) 金時習

高橋亨『李朝仏教』は、金時習を狂僧に喩え、特に彼の『蓮経別讃』は朝鮮時代に誇るべき文献と評価している。さらに金時習は道教、特に祈祷道教を批判したという。忽滑谷[1930]では、特に禅思想の側面で、金時習の雑著と『蓮経別讃』を取上げている。次いで、金昌奭[1977]「梅月堂金時習の行跡に現れた仏教思想の考察」が発表された。その後、韓鍾万[1993]「金時習の三教合一思想について」は、彼の思想を華嚴・法華・禅(曹洞宗)と分けて解析しているほか、実践的な立場を重視しながら三教円融論を立てたと評価している。

(2) 普雨

高橋亨[1929]は、普雨を朝鮮時代の僧侶の中で儒仏調和論の先駆者と認め、宗派としては華嚴宗の人と推測している。また念仏功德に関しては信仰上に一切説かなかったとする。続いて1959年の「虚応堂及普雨大師」では、普雨の文集の輸入の縁起を述べるとともに、普雨は朝鮮仏教の総合的仏教判釈を継承し、その態度が後に西山・惟政に継承されたとし、朝鮮時代の仏教史での彼の位置を高く評価している。

尚、忽滑谷[1930]では、普雨の禅思想が華嚴思想に基づいていると把握して、一正説を普雨の主な思想として提示してはいるが、彼の禅思想に往生極樂的要素を見出し、また、彼の観法が華嚴的であることを提示し、華嚴経跋を彼の主な論として出している。

(3) 西山大師休静

さて、朝鮮時代の僧の中で、最も注目を浴びている人物は西山大師休静である。西山大師に対しては、禅思想に関する研究史の整理は、禅思想の担当に譲り、ここでは、西山の浄土思想に関する研究をまとめることにする。

まず、高橋亨[1929]は『李朝仏教』の中で、西山は念仏して心口一体となることを求め、それこそ西方浄土に往生することであり、けれども、吾身が即弥陀であるから、弥陀仏が来るのではないといい。即ち、西山は念仏を禅を補助するものとして勸修したが、以後西山の真義が誤解され、念仏が見性成仏の一道として認められたという。次に、忽滑谷快天[1930]は西山は禅と念佛を両方行いながらも、禅は上根人のため、念仏は下根人ためであるとし、上根人は念仏が必要なく、下根人は逆であるといいながら、禅浄兼修に疑問を残した。以後年代において申正午[1983]「西山休静の浄土思想に関して」は、西山を念禅一致思想家として捉える。西山は徹底した弥陀信仰者ともいう。そして不生一念すれば自性弥陀と自心の浄土を表すことから理事円融を体得したという。しかし、念仏による往生と見仏を否定していない。

一方、古田紹欽[1986]「李朝仏教における西山大師休静をめぐって」は、西山の念仏は禅の念仏として唯心浄土、己身弥陀などで表現しても、往生

を意味するのではないという。李正模[1987]「西山休静の浄土思想と諸経—諸師の関係について—」では、西山の念仏は観念念仏といい、それを文献学的に追求している。その結果、西山の浄土思想は『観経』に基づきながら、達磨、弘忍、延寿の禅浄双修の思想を継承したという。最近では金敬熙[1998]が「西山大師の浄土思想」を発表しているが、内容的には進展していないことは残念である。

尚、申正午[1984]「西山大師の真言観について」では、西山が禅師でながらも真言の力を否定してないことを取り上げ、浄土思想を補っている。こうした西山大師に代表された朝鮮時代の浄土思想に関して、趙明烈[1998]「李朝時代仏教歌辞に現われた浄土信仰」では、浄土信仰でこそ朝鮮時代を貫く信仰として認め、それを仏教歌辞を通じて説明している。

6. まとめ

以上、簡単ながら朝鮮時代の研究の整理を行った。総じて日本での朝鮮時代に関する研究は論文自体少なく視点も多様ではない。その要因としては前にも触れたように、朝鮮時代の仏教を衰頹の仏教と見、教義上の重要な内容が少なくという観点があったが、宗教史、あるいは信仰史の面からは非常に重要であるとする場合が多い。しかし全体的にはいくつかの視点に限られ、研究が十分とはいえない。中でも儒教による排仏の影響の上に、儒教と仏教の関係を深く論じた研究はあまりない。

仏書刊行の事実と日本からの大蔵経の請求ということに関しては、高麗大蔵経への興味とからんで、研究が進んでいることは注目される。だが、仏書刊行や日本からの大蔵経の請求と朝鮮時代の僧侶との関連など、それに対する儒学者の仏教に対する態度など、まだ追究する余地はあると思われる。

さて、最後になるが、日本での朝鮮時代仏教の研究成果を述べるときに、高橋亨、江田俊雄、鎌田茂雄の三人は、最も重要な役割を果たしている。それに比べると彼等の研究に対する評価がなされていない。このように、

日本での朝鮮仏教に関する研究は新しい視点からの研究とともに、この三人の韓国仏教の研究に関する研究及び評価が必要となるものと思われる。こうした観点から、仏教からの整理ではないが、権純哲[1997]「高橋亨の朝鮮思想史研究」は意義のある研究である。

(参考文献)

- 青柳南冥 [1911] 『朝鮮宗教史』 朝鮮研究会(京城)
- 江田俊雄 [1930] 書評：李朝仏教を読む、『宗教研究』新7-1
[1932] 朝鮮本元亨釈書について、『現代仏教』2
[1934] 朝鮮語仏伝に就いて、『青丘学叢』15
[1935] 朝鮮版法華経異版考、『青丘学叢』22
[1936] 李朝刊経都監と其の刊行仏伝、『朝鮮之図書館』5-5
[1955] 足利義持による高麗藏経板の強請顛末、『印仏研』6
[1956] 日韓国交を媒介した高麗版大藏経—足利義持と李朝世宗の場合、『親和』35
[1956] 仏書刊行より見た李朝代仏教、『印仏研』7
[1958] 朝鮮の仏教、『講座仏教』「中国の仏教」
- 工藤英勝 [1998] 曹洞宗の朝鮮布教史、『宗教研究』315
- 大類純 [1971] 朝鮮仏教考察序説、『東洋学研究』5, 東洋大
- 今西龍 [1911] 朝鮮仏教関係書籍解題、『仏教史学』1-1, 1-2, 1-3
- 今村鞆 [1930] 足利氏と朝鮮の大藏経板、『朝鮮』186
- 川口卯橘 [1931] 大藏経板求請と日鮮の交渉、『青丘学叢』3
- 鎌田茂雄 [1983] 朝鮮仏教史, 玉城康四郎編『中国・チベット・朝鮮』
(世界宗教史叢書8, 山川出版社)
- 鎌田茂雄 [1987] 『朝鮮仏教史』 東京大学出版会
- 菅野銀八 [1921] 高麗板大藏経について、『朝鮮史講座』第5巻, 分類史, 朝鮮史編纂委員会
- 黒田亮 [1940] 『朝鮮旧書考』 黒田亮
- 小島勝 [1989] 近代における浄土真宗開教使の海外布教—台湾および朝鮮を中心に—, 『仏教文化研究所紀要』27
- 田川孝三 [1960] 李朝における僧徒の貢納請負—世宗末・文宗朝を中心として, 『東洋学報』43-2
- 高橋勝 [1987] 明治初期における朝鮮開教と宗教政策—特に真宗大

- 谷派を中心に—, 『仏教史研究』24
- 高橋亨 [1912] 朝鮮仏教に対する新研究, 『朝鮮及満州』60
[1914] 朝鮮仏教宗派通減史論, 『東亜之光』9-10,
[1916] 朝鮮寺刹の研究, 『東亜研究』6-1, 2, 3
[1922] 李朝における僧職の変遷, 『朝鮮』81
[1929] 『李朝仏教』 宝文館
[1951] 李朝僧将の詩, 『朝鮮学報』1
[1959] 虚応堂及普雨大師, 『朝鮮学報』14
- 中村健太郎 [1930] 書評：李朝仏教, 『青丘学叢』5
- 美藤遼 [1979] 明治仏教の朝鮮布教, 『三千里』15
- 古谷清 [1911-1912] 朝鮮李朝仏教史梗概, 『仏教史学』3-6・8・11-12
- 福士慈稔 [1995] 護国仏教の展開, 三友健容編『現代に生きる仏教』
東京書籍
- 吹田和光 [1974] 李朝時代に於ける僧軍について, 『仏教史学研究』
17-1
- 古田紹欽 [1986] 李朝仏教における西山大師休静をめぐって, 『印度
哲学仏教学』1
- 忽滑谷快天 [1930] 『朝鮮禅教史』 名著出版社
- 丸亀金作 [1966] 高麗の大藏経と越後安国寺とについて,
『朝鮮学報』37・38
- 村井章介 [1987] 朝鮮に大藏経を請求した偽使について
- 吉川文太郎 [1921] 『朝鮮の宗教』
- 権純哲 [1997] 高橋亨の朝鮮思想史研究
- 金敬熙 [1998] 西山大師の浄土思想, 『仏教大学大学院紀要』26
- 金昌爽 [1977] 梅月堂金時習の行跡に現れた仏教思想の考察, 『駒
大大学院年報』11
- 睦楨培 [1981] 19世紀頃の韓日仏教, 『印仏研』59
- 申正午 [1983] 西山休静の浄土思想に関して, 『印仏研』62
[1984] 西山大師の真言観について, 『印仏研』64
[1984] 李朝末期仏教界における日本仏教の影響, 『宗教研究』

- 259
- 李正模 [1987] 西山休静の浄土思想と諸経—諸師の関係について—, 『印仏研』 37
- 趙明烈 [1998] 李朝時代仏教歌辞に現られた浄土信仰, 『印仏研』 46(2)
- 蔡沢洙 [1971] 韓国仏教の伝統的学習教育課程について, 『印仏研』 38
- 韓基斗 [1973] 韓国仏教の実学的傾向, 円光大学主催セミナー, 『アジア公論』 2-9
- 韓鍾万 [1993] 金時習の三教合一思想について, 『印仏研』 83
- 洪潤植 [1976] 『韓国仏教儀礼の研究』, 隆文館

キム チョンハク

(東京大学大学院博士課程)

大乘仏教起源に関する一考察

朴 点淑 (一黙)

- I 大乘仏教起源説の問題
- II 大乘仏教運動の成立年代
- III 大乘仏教成立の社会的背景
- IV まとめ

I 大乘仏教起源説の問題

1. 大衆部からの起源

大乘仏教がいつ成立したか、当時のインド社会で、どのように位置づけられたものであろうか。確実な記録がないので、正確には判定できないが、一般的に大乘仏教は紀元1世紀前後に起こった新しい仏教運動であるといわれる。

大乘仏教の起源に関する問題が、学問的に論じられるようになったのは、明治以降になってからである。江戸時代まで、一切経は釈尊一代の説法と信じられていた。しかし、その時代にも富永仲基(1715~1746)のように『出定後語』を著し、客観的な立場で「大乘非仏説」を唱えた者もいた。近代になると、西洋の原典を忠実に読み下してみたいこうとする仏教研究が紹介されるに及んで、大乘経典は仏陀の直説であるとする伝統説に揺らぎが生じた。その間にあって村上专精(1851~1929)が『仏教統一論』や『大乘仏説論批判』などを著して、大乘経典が仏陀の直説でないことを論証したのである。

この大乘非仏説論を批判し、大衆部起源説を唱えたのは前田慧雲